原木シイタケ栽培
私と椎茸奮闘記

名人　横田　俊光(60)　岐阜県加茂郡川辺町
聞き手　水野　洋平　岐阜県立斐太農林高等学校2年
平成16年取材

「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもってその業を極め、他の模範となっている達人で、毎年、全国で約100名が選定されています。岐阜県においては、現在、33名の「森の名手・名人」がいます。
この「森の名手・名人」を「森の『聞き書き甲子園』」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から誌面の関係上要点を抜粋したものです。なお、年齢、住所、学年は取材当時のものです。

1. 子供の頃の夢は「養鶏」

私は、加茂郡川辺町に生まれたんでよ、幼いころから農業に打ち込んでいる父の姿を見ながら育ったんでね、父が私の大きな目標だったんですよ。だから、小学校の頃の作文にも「将来は父のようなたくましい百姓になりたい」なんて書いたりもしたんです。それで子供の頃は、学校へ行くにも友達と山の中を通ったり川岸を通ったり自然といつも一緒だったんです。

高校の頃には、農作物を作るほかに養鶏に興味を持ち始めたものだから、父に教えてもらいながら養鶏を始めてみたんですよ。高校の専門も畜産科で、高校1年から鶏を50羽ひなで飼って親父と一緒に鶏小屋を建て始めたくらいで鳥が大好きだった。

それで、2年生で100羽、3年生で150羽とどんどん殖やしていって卒業するぐらいには今から40何年か前ですけど、今でいう50万ぐらい所得があった。

学校っていうのが鶏の病気のこととか、産卵率がどうなのかとか実際に教えてくれる所で、課題を持って学校へ行っているものだから学校が楽しくてしょうがなかった。それで色々先生に聞いて、こういう時はどうだどうしたらいいとか、こんな風になったけど病気じゃないかとか、色んな風に毎日課題を持って私の中では養鶏への夢が大きくふくらんでいったんや。

2. 養鶏の道そして七面鳥へ

高校を卒業してからは、5年間ぐらい養鶏家として養鶏のプロとしてその当時でいう400羽ぐらいまで自分で飼育した。ただそれ以上に規模を拡大したり、あるいは養鶏の将来を考えると、もっと勉強をしないといけないということで、ちょうど国がアメリカに派遣する農業の研修生を募集していたので、すぐ応募して県内で5人、全国で200人に選ばれました。アメリカのオレゴン州という所に行ってすぐに向こうの大学に入学し会話の勉強や向こうの農業について勉強をやっている間に、カリフォルニア州にある100万羽養鶏を見ました。1400羽で日本では大きいと思っていたのに100万羽の鶏を一つの農場が経営している、鶏はあくまでも檻の中に閉じこめられて卵を産むだけの機械のように扱っているだけだと自分は感じちゃって、私の畜産に対する考えは、鶏すなわち生き物と対話してそれで卵を分けてもらうという考えなので、私は拒否反応を起こしてしまったんですよ。

そんな時にアメリカで仲良くしていたシェイム君のセスナ機で低い位置からアメリカの農場を見学することができてその時、羽を広げてのびのびと飛び回る生き物がいたもんだから、私はこれだ、これしかない！と七面鳥に興味が湧いてきて、研究テーマも鶏から七面鳥に変えて、これなら日本の土地でも放牧することができそうだし、企業として成り立つと考えたから残された1年半の研修に全てを賭けよう、そして日本における七面鳥のパイオニアになってやると、決心したんです。それで早速七面鳥を育てる大農場を紹介してもらって寝泊りしながら研究に打ち込んだんですよ。

帰国後は、一年かけて七面鳥の事業を始める準備をしていって放牧のために山を開いて、ヒナも契約を決めたんですよ。その頃、自分は稲沢にある食肉加工の会社に勤めながら七面鳥の販売のルートまで考えて、とにかく毎日が忙しかったんです。でも、一年経ったぐらいに七面鳥のヒナの入手先の会社がいきなり倒産して今までの計画が全て水の泡になっちゃって、そのときは結婚してたもんだから今まで頑張ったのにすごくショックでしたよ、あの時はね。

▼横田俊光さん

3. ピンチが成功に。そこには「ブナの木」が…

でも大地に根付いた農業を目指した夢に燃えていた自分を捨てるわけにはいかなかったんです。このときに、わらをもつかむ思いで椎茸を作ってみたんですよ。私の不屈の心って言うものが、ナラの木に植菌すれば椎茸が生えてくる、というわずかな知識と放牧のために切り倒したナラの木とを出会わせたと思ったんです。

そうだ、椎茸作りがあった。この日本にあるナラの木を活用して椎茸作りに取り組んだら、極めて日本的な産業となって道は開けるだろう。そう考えた私は、毎日のように椎茸栽培している家を廻って、一からあれこれと教えてもらったんです。その時同時に、自分で椎茸栽培の計画を立てるようになって、私の車を処分して得た70万円の資金を手に椎茸栽培をスタートしたんです。

まずは、木を集めたんですけど、この辺はほうが忙しくなり自分では切れなくなったんです。そして椎茸栽培はだんだんと軌道に乗ってきたんですよ。

そんな中私は、ある問題について考えていてそれは、椎茸の菌を入れる作業についてなんですね。昔は、全部手作業でやってたから軽いドリルでも一日使っていると夜には肩とか手があがらなくなって茶碗も持てなくなってある日、はくろう病になってしまったものだから、もっと簡単に作業できないか毎日、毎日考えたんです。そして、何日かたった日の夜中の2時くらいにパッとひらめいたものだからすぐにノートに書いて早速次の日に作ってみたら、これがものすごく楽で楽で一日の作業量がいっきに増えちゃって近所の人にもそんなに楽なものがあるなら私にも作ってくれって頼まれて最終的特許を取ったんです。そのときに「横田式椎茸穿孔機」という名前をつけたんです。そのあとは、椎茸を作る傍らこの機械の注文が私のところに全国から毎日のようにくるようになったんです。

その他にも一年中椎茸の栽培できる環境を考え、いつも椎茸に一番の環境を与えられるように考えていて椎茸に一番いい水温や温度も独学で研究したんです。家の椎茸園はもうひとつ条件を変えた中で椎茸の栽培をしたりもしてるんです。その中では、川辺の椎茸園とは違った生育を見せてくれるんです。その訳というのは、やっぱり川辺よりも夏が涼しいからということなんですよ。川辺の椎茸園でもやはり涼しいところが一番生育がいいんです。その他にも、椎茸菌を起こすために水につけるんですけど、その水もどの水温だったら一番いいのかというのを研究して20度以下というのを自分なりに導き出したんです。

4. 本物のきのこ

今は、原木椎茸よりも菌床椎茸のほうがみなさんの家には多いと思うんだけど、菌床椎茸というのは私に言わせれば「きのこ」じゃないと思っているんです。なんでかというと菌床椎茸は、木くずに色々な養分を混ぜてそこに菌を入れて椎茸を栽培するからです。そもそも椎茸というのは、きのこ、すなわち木の子供だからしっかりと木の栄養や温もりをもらって育たなければいけないと思うんです。

5. 椎茸は海を越え

椎茸栽培が軌道に乗ってくると、私の目は遠く海外へ向くようになったんです。私の中に、椎茸作りを日本だけにとどめないで、海外にも広げられないかという地球規模的な発想が芽生えてきたんです。

そこで私が最初に目をつけたのが、気候もよく、資源も豊富なブラジルなんです。幸いブラジルに派米時代の友人もたくさんいたもんだから、その人たちに連絡をとって、早速椎茸の栽培普及や市場調査に行ったら、十分な手ごたえがあって見通しも明るくなったんです。そのときの友人に、現地のナラやクヌギのどんぐりの種から、15万本の苗木を育てるように約束して帰ってきたんです。それが5年後の昭和62年に実り現地からの要請もあったから、またブラジルに行って指導してきたんです。

最初は、ブラジルの方で土地を買って椎茸を作ろうと思ったんですが、それが得策でないことがわかって、椎茸作りは向こうの知人に任せて、私は栽培技術のアドバイスや、向こうからきた研修生の指導に力を入れるようにしたんです。栽培技術を身に付けた人が、たくさんブラジルには必要だからなんです。

その後は、ブラジルからの研修生を多く家に招いて、生活を一緒にして指導してきたんですけど、研修の成果とは別に、それぞれの研修生の良さが私や私の家族に反映されたりして、いい相互関係になっているんですよ。

▲地元中学生に干し椎茸の体験学習の指導をしている横田さん

ナラがとても多くて椎茸を作るにはとてもよかったんです。でも普通農家が始める椎茸栽培は、千本から二千本で、私は何も知らないから一万本からやろうと決めて、そうなるとこの辺だけで木を集めようとすると、ほかの農家に迷惑をかけてしまうと気付いたんです。だから、私は日本地図を広げて木炭の生産をしている所を探したんです。なぜかというと昔の木炭にはナラやクヌギが使われていたからで、東北の福島にちょうど木炭を生産している会社を見つけたもんだから、早速電話をしてみたんですよ。そしたら「あるよ、ウチには、ナラとクヌギしかないけど」と言われて、これだと思ったんです。

そして山を見せてもらいに福島まで行ってみたら山中ナラとクヌギだらけで私は、ここから木を買うように決めて向こうの青年に「木を切ってくれれば私が買うから」と言って木を手に入れたんです。でも実際は、3年間自分で木を切っていたんですけど、椎茸の

▲最近は毎年1haのクヌギの植林に励んでいる

名人　横田俊光（よこたとしみつ）さんのプロフィール

- 生年月日：昭和18年9月8日生まれ
- 出身地：岐阜県加茂郡川辺町
- 職業：原木シイタケ栽培

岐阜県立加茂農林高等学校を卒業し、その後2年間米国に研修に行った。昨年まで椎茸園を経営していたが今は、息子たちに椎茸園を任せその手伝いをしている。今は、奥さんの喜子さんと息子夫婦と生活している。

※原本は長文のため、文章の一部を割愛しています。

【森の名手・名人編集担当
㈳岐阜県緑化推進委員会　佐藤正吉】